

百科辭典知識對於[[X]動詞連用形]複合詞造詞 力及詞意透明性之影響

葉 秉杰*

摘要

在本論文中筆者從不將語言知識與百科辭典知識分離的立場，將[[X]動詞連用形]複合詞視為一種構式，並主張此構式的造詞力與詞意透明性的差異是來自背景知識的不同。

關於造詞力，我們可以依據背景知識與指示的不同將同樣主要語動詞的複合詞做次分類，這些次分類的造詞力也各不同。例如，筆者從日本警匪劇所收集來的「青木殺し」類的複合詞比從新聞收集來的「提灯殺し」類的複合詞造詞力來得強。前者是因為警察有必要區分受害者是誰，因此知道這個背景的人可以從表示各個事件的複合詞中抽出含有特定人名的[[X]殺し]這個基模，而得到較高的造詞規則。後者並非實際表示什麼人被殺，而是一種比喻，因此規則性低，無法從中抽出基模提高造詞力。

關於透明性，「ゴミ拾い」「錆び出し」「鍋壊し」這三個詞雖然都可以分析為XをV，但依據背景知識的不同，依序降低透明性。相較於「ゴミ拾い」的背景知識比較一般，「錆び出し」指的是日本傳統工藝品的製造過程，而「鍋壊し」表示的卻是魚。因此，對於沒有這些知識的人來說，後兩者便不是一個詞意透明的複合詞。

關鍵詞：[[X]動詞連用形]複合詞、造詞力、透明性、百科辭典知識、構式

* 國立政治大學日本語文學系助理教授

Encyclopedic Knowledge's Effect on [[X] Verb] Compounds' Productivity and Transparency

YEH Pingchieh*

Abstract

In this paper, I claim that the productivity and the transparency of [[X]continuative form of verb] compounds vary according to people's background knowledge of compounds. As for productivity, I argue that we can sub-categorize [[X]continuative form of verb] compounds with the same head into several types, and the productivity of them are different. For example, *Aokigoroshi* type, which I picked up from police TV drama, is more productive than *chochingoroshi* type, which I collected from newspaper. The construction of *Aokigoroshi* is [[name of specific victim] goroshi]. The user, policeman, can change victim's name to form a new compound, and thus it is productive. In contrast, *chochingoroshi* type doesn't mean that someone killed a lantern. It is used as a metaphor and thus we cannot extract construction [[x]goroshi]. As for transparency, *gomihroi*, *sabidashi*, and *nabekowashi* can be analyzed into [[object] verb], but their meanings are getting opaque due to people's background knowledge of them. The situation of using *gomihroi* is common to everyone, but *sabidashi* is common to people who understand manufacturing process of Japanese traditional craft products. Furthermore, although *nabekowashi* morphologically seems to mean to break a cooker', it indicates a kind of fish.

keywords : [[X]continuative form of verb] compound, productivity, transparency, encyclopedic knowledge, construction

* Assistant Professor of Department of Japanese of NCCU

[[X]動詞連用形]複合語の生産性及び意味の透明性に対する百科事典的知識の働き

葉 秉杰*

要旨

本稿は、百科事典的知識と言語の知識を連続的に捉える立場から、[[X]動詞連用形]複合語の生産性及び意味における差は背景知識の違いによるものだと主張し、コンストラクションとして捉える。

生産性については、主要部動詞が同じでも背景知識とプロファイルによって下位分類ができ、生産性に違いが生じる。例えば、刑事ドラマから採集した「青木殺し」類は新聞記事から採集した「提灯殺し」類より生産性が高い。これは、前者は警察にとって被害者は区別されなければならないという背景知識を有し、固有名詞が含まれる[[X]殺し]というスキーマが抽出できるのに対し、後者は実際 X を殺しているわけではなく、比喩表現であるためである。

透明性についても、背景知識によって「ゴミ拾い」「錆び出し」「鍋壊し」は全て X を V と分析できるが、順に透明性が下がる。つまり、「ゴミ拾い」は背景知識が一般的であるが、「錆び出し」は伝統工芸品の製造過程を表し、さらに「鍋壊し」は語源の知識を持っていない人ならば意味がわからない。

キーワード：[[X]動詞連用形]複合語、生産性、透明性、百科事典的知識、コンストラクション

* 国立政治大学日本語文学系助理教授

[[X]動詞連用形]複合語の生産性及び意味の透明性に対する百科事典的知識の働き

葉 秉杰

1. はじめに

百科事典的知識と言語の知識が別々に我々の脳内に存在するか、それとも分けることのできない連続的なものか長く議論されてきた（影山 2005）。生成文法を代表とする形式主義の言語学者は両者を分ける立場であるのに対し、認知言語学の言語学者は両者が連続的なものであり、はっきり線引きできないとする立場である。本稿では後者の立場から、日本語の[[X]動詞連用形]複合語の生産性及び意味の透明性に対する百科事典的知識の働きを明らかにする。

2. [[X]動詞連用形]複合語とは

本稿で述べる[[X]動詞連用形]複合語とは、「栗拾い」や「早起き」、「立ち読み」のように、ある X（名詞、形容詞、動詞（連用形）、副詞、接頭辞など）と動詞連用形からなる複合語のこと¹である。このような複合語はこれまで動詞由来複合語（*deverbal compound*）と語根複合語（*root compound*）に下位分類されており、両者の違いは主に X と動詞の関係（語構成）にあるとされてきた。動詞由来複合語は下記（1）に見るように、X と動詞が文法関係にあり、X が動詞の内項（*internal argument*）か付加詞（*adjunct*）かによってさらに 2 つに分類される。語根複合語は下記（2）に見るように X と動詞が様々な関係のもので、簡単に言い換えることができず、先行研究では「花時計」や「菓子皿」のような[[X]名詞]複合語と同等に扱われている。

¹ 厳密に言うと、従来の定義によれば派生語に属するものも含まれている。

- (1) 動詞由来複合語：a. 内項複合語：栗拾い（≒栗を拾うこと）、
金持ち（≒金を持つ人）、ネジ回し（≒
ネジを回すもの）、崖崩れ（≒崖が崩れ
ること）
b. 付加詞複合語：早起き（≒早く起きること）、立ち読み²（≒立って読むこと）
- (2) 語根複合語：梅干し³（梅を干してさらに加工した食べ物）、
人形焼（人形の形をした焼き菓子）、有田焼（有
田で作られた焼き物、磁器）、輪島塗（輪島で
作られた漆器）、星組（宝塚歌劇団の組の一つ）

語根複合語はXと動詞の関係が様々で規則性が低いとされているため、先行研究では考察対象から外されることが多いが、本稿では[[X]動詞連用形]複合語の一種と見なし、考察を行う。

3. [[X]動詞連用形]複合語の先行研究

[[X]動詞連用形]複合語に関する先行研究は主に生成意味論の見地からなされてきた。それによれば、我々人間の脳には言語を専門的に処理するモジュールがあり、さらに、モジュールは文を処理する統語部門と語を処理する語彙部門があると考えられる。影山・柴谷（1989）、影山（1993）は、合成語は統語部門で形成される統語的なものと語彙部門で形成される語彙的なものがあり、語形成レベル、語形成部門の違いによって、統語や生産性など、全て異なると主張

² このように対応する複合動詞が存在しないもの（e.g. *立ち読む）が動詞由来複合語に分類され、複合動詞の連用形名詞（e.g. 付き合い）と区別されている。

³ 語根複合語の本来の定義に基づくと、[[X]動詞連用形]複合語の中で真に語根複合語と言えるものは動詞連用形が一つの自立する名詞として用いられるものになる（e.g. (2)最後の「星組」）。しかし、伊藤・杉岡（2002）などでは「梅干し」は後項が連濁するところから、他の内項複合語とは異なり、単に梅を干しただけではなく、また、構造を[[梅_N][干し_v]_N]_Nのように想定している。本稿ではXと動詞の関係を重視し、Xと動詞が文法関係でなければ語根複合語とする。

している。それ以降の語形成の研究も基本的にその考えを受け継いで論じてきた。以下では生産性と意味の透明性を中心に、先行研究別で見ていく。

3.1 影山（1993、1999）

本稿の考察対象のような複合語は影山（1993）では語彙部門で形成されているとされている。その根拠の一つとして、語彙部門で形成された複合語は意味が慣習化されると影山は説明している。例えば、「船乗り」は単に船に乗っている人ではなく、それを職業としている人であり（同：8）、また、「山登り」は「スポーツないしリクリエーションの活動として山に登ることに限定される」（影山 1999: 2）。そのため、「*行方不明者を捜しに山登りをする」（同上）という表現が不適格になる。

3.2 河上（編）（1996）

河上（編）（1996）は[[X]動詞連用形]複合語の研究ではないが、カテゴリー化の説明において、[[X]動詞連用形]複合語への言及がある。河上は、下記の例を挙げ、基本レベルの語は他の語と結び付きやすく、上位レベル及び下位レベルの語は特殊な例や慣用句を除き、新語を作りにくいと述べている。

- (3) a. 花見
- b. (?)桜見/梅見/??桃見
- c. ??植物見
- (4) a. 椅子取りゲーム
- b. ??肘掛け椅子取りゲーム

河上（編）（1996: 35 一部省略）

河上の説明によれば、「桜見」と「桃見」が新語として成立しにくいのは桜と桃が花の下位概念であるためであり、また、「植物見」が

成立しにくいのは植物が花の上位概念であるためであるという。同様に、「肘掛け椅子取りゲーム」が新語として成立しにくいのは肘掛け椅子が椅子の下位概念であるためとなる。

3.3 杉岡・小林（2001）、伊藤・杉岡（2002）

杉岡・小林（2001）、伊藤・杉岡（2002）は語構成及び音韻、意味、統語、生産性などの特徴から、[[X]動詞連用形]複合語を内項複合語と付加詞複合語に分けている。項構造（argument structure）で形成される内項複合語は「統語的な性格が強く、生産的で意味や形態も透明性が高い」（杉岡・小林 2001:267）とし、語形成が規則的で、簡単に新語が作れる（＝（5））としている（伊藤・杉岡 2002:130-131）。それに対し、語彙概念構造（lexical conceptual structure）で形成されるとされている付加詞複合語は「可能な語」でも「実在する語」になることが少なく（＝（6））、語彙的なものとされている（#は実在しない語を示す）。

(5) 超能力によるスプーン曲げ

無理な機首上げが、今回の飛行機事故を引き起こした

コンピュータのプログラムのバグひろい

運動会の応援では1年生が声出し、2年生が手叩きをする

暴走族によるバイクのナンバー隠し

(6) 道具+動詞:#車運び(車で運ぶ)、#ハサミ切り(ハサミで切る)

様態+動詞:#早喋り(早く喋る)、#網採り(網で採る)

原因+動詞:#仕事悩み(仕事で悩む)、#雨濡れ(雨に濡れる)

結果+動詞:#薄伸ばし(薄く伸ばす)、#高積み(高く積む)

伊藤・杉岡（2002: 130-131 一部省略）

3.4 斎藤（2005）

斎藤（2005）は、（[[X]動詞連用形]複合語の後項となる）動詞の選

択制限 (selectional restriction) はレベルによって差が出ると指摘し、統語レベルで選択できる対象でも語構成レベルにおいて選択できなくなることがあることから、内項複合語は伊藤・杉岡 (2002) が強調しているほど生産的でないと主張している。例えば、「人殺し」、「親殺し」、「子殺し」、「嬰兒殺し」はいずれも内項複合語として成立するが、「*孫殺し」、「*犬殺し」は成立しない。また、「雨降り」、「霜降り」も内項複合語として成立するが、「*霰降り」、「*雹降り」は容認されないという。この問題点を解決するために、斎藤は「レベルの峻別」を提案している。同一の動詞でも、統語レベルにおける選択制限と語構成要素レベルにおける選択制限を区別するものである。また、それによると、動詞によっては（語構成要素レベルにおける）制限がゆるいものから強いものまでである。

(7) 制限が弱い動詞：集める、選ぶ、配る、探す、調べる、作る、届ける、貼る、掘る、磨く...

制限が中ぐらいの動詞：余る、飼う、書く、隠す、崩れる、切れる、殺す、消す、断つ、縫う、抜く、運ぶ、拾う...

制限が強い動詞：開く、当たる、洗う、置く、押す、買う、冷ます、死ぬ、知る、捨てる、助ける、叩く、騙す、使う、投げる、飲む、踏む、降る、曲げる、忘れる...

斎藤は、「制限が厳しく、差し当たり結合相手を列挙できる場合でも、新たな結合を生じる可能性が常に存在する」と述べ (同: 132)、この制限を開かれた集合としているが、なぜこのような差があるのかについては触れていない。

3.5 浅尾 (2007、2009)

浅尾 (2007、2009) は伊藤・杉岡 (2002) の論点を踏襲し、内項

複合語が生産的であり、付加詞複合語が非生産的であるとしながらも、生産性は意味によって動機付けられていると主張している。そして、コーパス調査を通して、内項複合語にも一部語彙的なものがあり、付加詞複合語にも一部生産的なものがあると主張している。

(8) 生産的な付加詞複合語⁴：[]生まれ、[]沿い、[]行き

(9) 語彙的複合語：秒読み、金持ち、日焼け

生産的なものは(8)に示したように構文 (construction ; 本稿でコンストラクションと呼ぶものに相当する) が抽出でき、前項に代入できる要素が比較的自由である⁵。浅尾は生産的な構文には前項に固有名詞が生起し得る点を指摘し、固有名詞は普通名詞とは違い、カテゴリー化する機能がないため、生産性が高くなると説明している。

それに対し、語彙的なものは例えば(9)の「秒読み」のように、内項複合語に分析できても、全体として動作の名付け(浅尾は [[]N-[]v/[]vING OF[]N]N というコンストラクションで表示している)ではなく、独自の意味を持つコンストラクションとして定着している。

3.6 葉 (2012、2015)

葉 (2012) は、生産性が低いとされた付加詞複合語にも下記のような新語が存在していることを指摘し、その語形成は百科事典的知識と関係があると主張している。

(10) 荒砕き堅焼き煎餅 (商品名/亀田製菓)

堅あげポテト (商品名/カルビー)

窓つり広告 (函館市電)

タレの二度漬け禁止 (大阪の串揚げの店)

大人の家飲みを楽しもう (サッポロビールの広告)

⁴ []沿い及び[]行きは前項に現れる要素が動詞にとって省略できないものであるため、厳密に言うと内項複合語である。

⁵ 語の形態的緊密性を破ることがある。例えば、「どこ行き」、「どこ生まれ」のように代用形が前項に現れることがある。

リズム殺しと鈍器殺し（お笑い芸人のジャルジャルのコント）

葉（2012: 147）

葉は、[[X]動詞連用形]複合語を単に規則的かあるいは語彙的かでは上記（10）の例の存在を説明することができないとして、百科事典的知識（フレーム；frame）を導入している。例えば、「窯焼き」は主にパン類の修飾成分として用いられるため、パンに関する百科事典的知識によって語形成が動機づけられていると考えられる。

（11）パンのフレーム

材料：小麦粉

形状：丸い/細長い...その他様々

目的：食べ物

成り立ち：小麦粉を練って、それをオーブンで焼いて作る

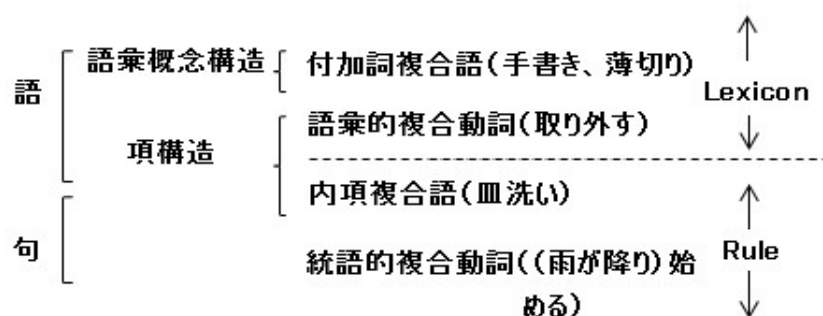
葉（2012:152）

パンは一般的にオーブンで焼いて作られる（デフォルト値）ため、「*オーブン焼きパン」のように言語化されないが、デフォルトでない「窯焼き」が焦点になるため、新語として成立すると葉は説明している。

3.7 まとめ

上記の先行研究は影山（1993、1999）を除き、基本的に伊藤・杉岡（2002）の下記図1の主張をもとに発展してきた。

図 1. 概念の複合による語形成とレベル (伊藤・杉岡 2002: 144)



影山 (1993、1999) は、[[X]動詞連用形]複合語はすべて語彙的で、「*槍降り」のように自由に複合語を作れないとしている。しかし、(5)に見たように、[[内項]動詞連用形]の場合、一定の生産性があり、意味も読み取りやすいものもある。一方、[[内項]動詞連用形]でも、「*孫殺し」のように成立しないものがあることから、斎藤(2005)は、動詞によって生産性が異なることを指摘している。しかし、本稿の調査では、斎藤では制限の強いとされている動詞で作った複合語が制限の弱いとされている動詞で作った複合語より数多く見られた。

4. 先行研究の問題点

上記の多くの先行研究は、[[X]動詞連用形]複合語が生産的であるかどうか、意味が透明かどうか、基本的に言語内の問題としてきたが、葉 (2012) の付加詞複合語に対する考察から見たように、百科事典的知識も複合語に何らかの影響を与えていると考えられる。先行研究に記述的研究が少ないため、筆者は 2019 年 7 月から 2020 年 8 月にかけて、先行研究及びテレビ番組 (ドラマ『相棒』等、バラエティ『水曜日のダウンタウン』等、ニュース)、ホームページ (Yahoo! Japan 等) などから合計 3,025 の [[X]動詞連用形]複合語を採集し、斎藤 (2005) が取り上げた動詞が主要部になった [[X]動詞連用形]複合語の生産性と意味を中心に観察した。その結果、以下の問題点が明らかになった。

4.1 生産性の問題点

斎藤（2005）は語構成レベルの選択制限を開かれた集合としながらも、どのような条件の下で、制限の厳しい動詞が新たな組み合わせが可能になるかは説明されていない。実際、筆者が斎藤の挙げた動詞を3,025の実例と対照したところ、斎藤の主張に一致しない例もあった。例えば、斎藤で制限が強いとされている「開く」を主要部とした例は（12）に示すように14語あり、そして制限が中ぐらいのものとして挙げられた「-殺し」を主要部とした[[X]動詞連用形]複合語は斎藤が挙げた例を除き、16語あり、制限が低い「調べる」を主要部とした例は0語で、同様に制限が低いとされた「配る」を主要部とした例は（14）に示す4語で⁶、むしろ斎藤の主張と反対の結果が出ている⁷。

（12）幕開き、内開き、海開き、運開き、外開き、プール開き、横開き、海水浴場開き、鏡開き、背開き、腹開き、左開き、右開き、山開き

（13）瀬川楓の夫殺し、刑務官殺し、警官殺し、女子大生殺し、青木殺し、閣僚殺し、支店長殺し、下山殺し、田代刑務官殺し、浪岡殺し、美大生殺し、バーのママ殺し、息子殺し、初見殺し、提灯殺し、鬼殺し

（14）気配り、ティッシュ配り、ビラ配り、目配り

上記の例の中でも（13）に注目されたい。上記の河上（編）（1996）によれば、Xには基本レベルの語のみ生起しやすいことになるが、（13）は下位概念のみならず、「瀬川楓の夫殺し⁸」や「青木殺し」

⁶ 一名の査読者からインターネットでは「整理券配り」「焼き芋配り」「お金配り」「お笑い配りおじさん」「生活物資配り」「お菓子配り」「言葉配り」「おみやげ配り」「プリント配り」「新年恒例の『餅配り』」「チラシ配り」等11語が見つかったとの指摘があった。しかし、斎藤の主張に一致しない現象が上で述べた通りで、その現象を説明することが本稿の目的であるため、個々の動詞の記述的研究は今後の課題としたい。

⁷ 全ての動詞が斎藤の主張に反するわけではなく、斎藤の主張に一致するものもある。

⁸ この例はテレビドラマ『相棒』から採集した例で、瀬川楓が夫を殺した事件

に見るように固有名詞（人名）も生起している。浅尾（2007）の説明によれば、固有名詞が生起し得るのは生産的な動詞のみであるが、「-殺し」は斎藤（2005）では制限が中ぐらいの動詞である。

4.2 意味の透明性の問題点

本来、ある複合語の意味が透明であるかどうかはその語の語構成が分析できるかどうか、かつ語構成要素から話し手及び聞き手にその意味が推測できるかどうかによる（Bauer1983）。例えば、「赤ペン」は「赤+ペン」から作られ、ペンの一種であるため、透明な語である。それに対し、「うみねこ」は「うみ+ねこ」であるが、猫の一種ではなく、カモメ科の水鳥のことであるため、不透明な語である。杉岡・小林（2001）、伊藤・杉岡（2002）が内項複合語を透明としているのは、それらが挙げた「ゴミ拾い」や「山登り」に見るように、簡単に「ゴミを拾う」、「山に登る」と分析できるためだと思われる⁹。しかし、影山（1993、1999）が指摘したように、「山登り」は「*行方不明者を捜しに山登りをする」とは言えず、スポーツないしリクリエーションとしての活動に限られている（同:2）。その点を考えると、一つの語が透明と言えるかどうかは下記の二点を考慮に入れる必要がある（プロフィールとベースの定義は後述する）。

(15) 語の中核的な意味（プロフィール）

語の成立に不可欠な背景知識（ベース）

実際、筆者が集めた例の中で、内項複合語と分析できるにもかかわらず、透明とは言いにくい複合語も数多くあった（cf. 浅尾 2009 が挙げた「秒読み」もそうである）。例えば、

ではなく、瀬川楓の夫が殺された事件を表す複合語である。つまり、この複合語も形態的緊密性を破っているわけであるが（cf. *[[たくさんの金]持ち]、*[[高い]山登り]）、浅尾（2007）の説明によれば、形態的緊密性を破れるのは生産性の高い動詞のみとなっている。

⁹ 本来、内項複合語とされた日本語の[[X]動詞連用形]複合語は英語の[[X]ing]、[[X]er]に対応するものである。

- (16) アリクイ、キツツキ、ヤドカリ、ヤモリ、フンコロガシ、ミズスマシ、ハネカクシ、カダヤシ、ホタテ、アメフラシ、(カマキリ、ママカリ)
- (17) 猫可愛がり、虫干し、粉落とし、鍋壊し、物取り、物もらい
- (18) 布目切り、錆び出し、お茶だき、すじ打ち

(16) はすべて生物を表しているが、その語構成に分析可能性の差が出ている。例えば、「アリクイ」は「アリを食う(爬虫類)」を表し、「キツツキ」は「木を突く(鳥)」を表すが、「ヤモリ」はその音韻から「家を守る(爬虫類)」を表すのが推測しにくい。また、「ホタテ」は「帆を立てる貝」を表し、「アメフラシ」は「雨を降らす(海の生物)」を表すとは言えず、不透明である¹⁰。

(17) は「NをV」と分析できるが、語構成要素から意味を推測できず、例えば、「猫可愛がり」は「猫を可愛がること」ではなく「猫をかわいがるように、甘やかしてかわいがること」(『デジタル大辞泉』)である。「物取り」と「物もらい」は前項が「物」であるが、「物取り」は強盗で、「物もらい」は眼病であり、いずれも意味が不透明である(cf. 「物置」)。

(18) も「NをV」と分析できるが、語の背景知識が推測しにくい¹¹。「錆び出し」は「錆を出すこと」と理解されるが、どのような場面で用いられるか「山登り」と比べるとわかりにくい。

5. コンストラクション形態論とフレーム理論

生成意味論の立場の先行研究は、複合語は語構成の(人間の生

¹⁰ 興味深いことに、[XをV]に分析できるかどうか、外来語であるか外来語でないかにかかわらず、生物を表す語は「キリン」、「マムシ」、「ゴキブリ」、「コイ」に見るようにカタカナ表記の傾向があるようである。筆者が複数の日本語ネイティブに確認したところ、同じく生物を表すこれらの例でも分析できるかの意識が変わることが判明した。

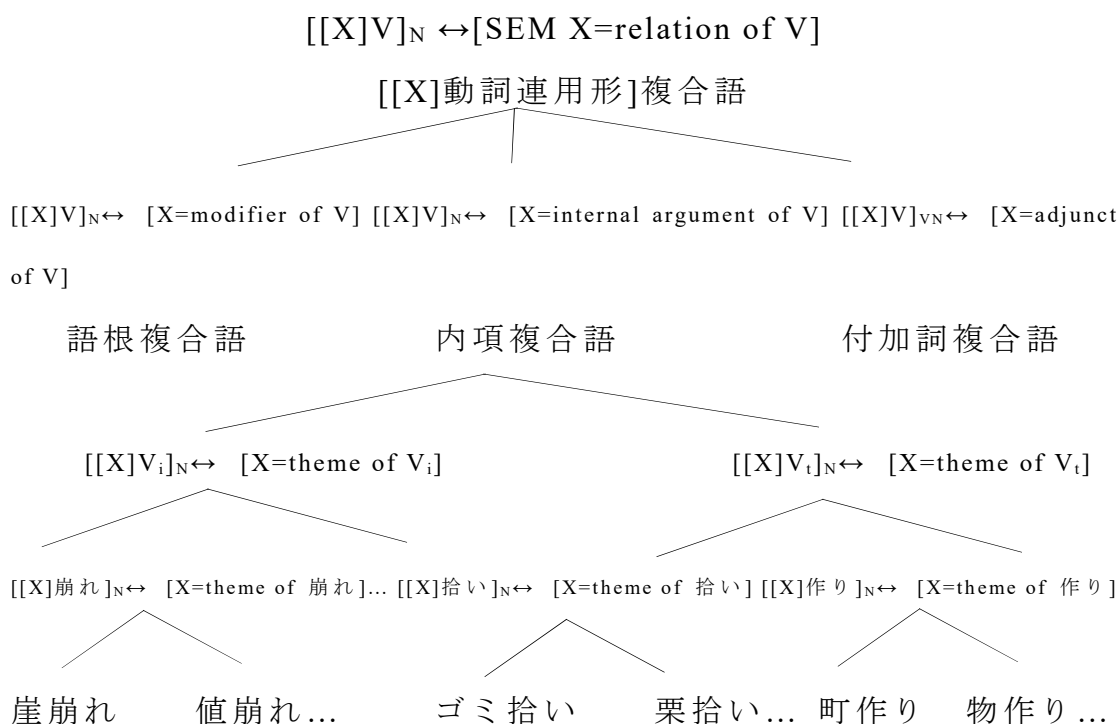
¹¹ (16)(17)の例は複合語内部に主要部が見つからず、英語の[-ing]タイプの動詞由来複合語にも訳せないのに対し、(18)はそうではない。

れつきの)「部門」の違いで性質が変わると考えてきた。しかし、規則的で意味が透明とされてきた内項複合語は上記の問題点が存在している。本稿では、語には規則性と語彙性の両性質があるという考えを支持しながらも、上記の現象に基づき、浅尾(2007、2009)と同様に、規則は事例の共通点から抽出されたものであり、また、生産性は意味によって動機づけられたものであると考える。以下では本稿の理論的な枠組みを簡単に紹介する。

5.1 コンストラクション形態論

Booij(2010)が提案したコンストラクション形態論(construction morphology)は構文文法の理論を汲み、形態論に特化した理論である。それによれば、コンストラクションは文と同様に意味と形態のペアであり、合成語は最小のコンストラクションである。合成語を作る規則は生まれつきのものではなく、様々な事例の共通点から抽出されたスキーマ(schema)である。スキーマにはより具体的なものからより抽象的なものまであると考えられる。この理論に基づくと、日本語の[[X]動詞連用形]複合語は以下のように図示できる。

図 2. [[X]動詞連用形]複合語の階層構造¹²



構造の各レベルの左側は形態を示し、右側は意味構造を示す。例えば、最も抽象的なレベルの[[X]V]_Nは、前項が何らかの要素 X を代入でき、後項が動詞連用形 V に固定していることを示す。そして小文字の N はこの構造が名詞 N を示している¹³。右側の[SEM X=relation of V]は、左側の形態の意味 SEM は、X が V と何やらの関係を持っていることを示している。

先に見た斎藤（2005）が提案した「語構成レベルの選択制限」はこれに似た概念である。しかし、斎藤の提案では抽象的なレベルを想定していない¹⁴。また、斎藤（2005）は「語構成要素レベルの選択制限」が開かれたもので、制限の強い動詞でも新語を作れる可能性

¹² 紙幅のため、語根複合語と付加詞複合語以下の階層は省略する。

¹³ 厳密には、さらに普通名詞と動名詞、形容名詞に分けるべきであるが、ここでは便宜上 N で一括する。

¹⁴ 西尾（1988: 109）は「複合語が新たに形成されるのは、既存の複合語の実例が作り出している「型」をモデルとして類推的創造（analogical creation）が行われるためである。したがって、ある「型」が有力であるかどうか、生産的な語形成様式であるかどうかは、その型に属する実例数の大小によるところが大きいであろう」と述べ、これに似た概念を提示している。しかし、斎藤（2005）と同様に抽象的なレベルを想定していない。

が存在していると断っているが、その提案は言語内の（生得的な）制限であり、コンストラクション形態論の立場とは異なる。

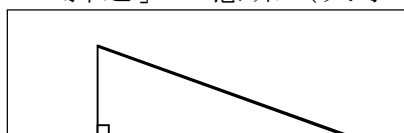
スキーマ自体は自由に複合語を「生成」できないが、新規の事例に適用させる時、より具体的なスキーマが優先的に選択されると考えられる。事例の全くない動詞にはスキーマが抽出されないため、事例が一つもない動詞で新語を作るのは難しい。動詞によっては生産性が異なるのはこのためである。しかし、その場合、より抽象的なレベルのスキーマが用いられる。

また、スキーマは文と同様に、形態と意味を持つコンストラクションであるため、文にパラフレーズできない場合があり、できた複合語にも何か付加的な意味が付け加えられる（コンストラクション独自の意味を持つ）と考えられる。例えば「後ずさり」は語源的に「後にすすむ」と分析できるが、現代文では「すすむ」は自立した動詞として用いられない。また、「キツネ狩り」は「キツネを狩る」と換言できるが、「キノコ狩り」は「*キノコを狩る」とは言えない。つまり、[[食材]狩り]_Nが独自の意味を持つスキーマを形成していると考えられるのである（e.g. ぶどう狩り、さくらんぼ狩り、梨狩り、りんご狩り...）。

5.2 百科事典的知識

認知言語学ではある語を理解するためにはその語が直接指示するもの、こと（プロファイルという）だけではなく、背景知識（ベース）も理解しなければならないと考えている。よく挙げられる例として、「斜辺」は「線」の一種であるが、「斜辺」が「斜辺」であるために、背景知識としての「直角三角形」も知っていなければならない。この場合、「斜辺」はプロファイルで、「直角三角形」はベースとなる。

図 3. 「斜辺」の意味（太字の部分）



ベースはプロファイルを直接支えている概念であるが、ベースの背後にも様々な知識が存在すると考えられる（ドメインという）。例えば、上記 3.1.6 の（11）がパンに関する 4 つの事項がドメインに相当する¹⁵。

6. 分析

6.1 生産性

この節では（12）と（13）を例に挙げ、「-開き」タイプと「-殺し」タイプに分け、議論を進める。

6.1.1 「-開き」タイプ

（12）は複合語の意味によって、下記（19）～（22）のように下位分類できる。

（19）海開き、プール開き、海水浴場開き、山開き

（20）内開き、外開き、左開き、右開き、横開き

（21）背開き、腹開き

（22）運開き、鏡開き、幕開き

（19）は一般的に閉鎖されていた場所または休止されていた活動の再開の文脈で用いられる。つまり、この種の「X 開き」は以下のスキーマが抽出できると考えられる。

（23）[[X]開き] ↔ [SEM =restarting X]

これに基づくと、閉鎖されていた場所の再開という背景があれば、

¹⁵ 葉（2012）の記述はクオリア構造に倣ったものであり、また、クオリア構造は百科事典的知識を言語の知識として取り込もうとする構造であるが、あくまでも百科事典知識と切り離されたものである。

様々な[[X]開き]_Nが作れると考えられる。実際、Ninjal for TWCで検索したところ、事前調査の3,025語に入っていないが、上記のスキーマに合っている[[X]開き]_Nは「学級開き」と「授業開き」がヒットしている。(20)は扉の開き方を示すものである。物理的に考えられる扉の開け方が限られているため、その開け方を表現する複合語の数は制限されるはずである¹⁶。(21)は魚の開き方を示すものである。魚も物理的もしくは文化的に一定の捌き方しかないので、それを示す[[X]開き]_Nは背景知識の違う(20)より少なくなる。(22)は全て背景知識が異なり、例えば、「鏡開き」は鏡餅及び酒の樽を割る行為を示すが、「運開き」はそれと関連しない。このような複合語は共通点が少なく、複数の事例からスキーマが抽出されないため、非生産的だと考えられる。

斎藤(2005)が制限の強い動詞として取り上げた「開く」は「ひらく」なのか「あく」なのか不明であるが、「あく」であれば、筆者の調査では「幕開き」のみとなり、斎藤の説明の反例にはならないが、有対自動詞・非対格自動詞ベースの内項複合語は自然現象や非人為的、非意図的な現象を表すものが数多くある(e.g. 崖崩れ、雨降り、パイプ詰まり、人死)。これらの現象も限られているため、内項複合語を作る生産性もやはり背景知識によって制限されていると考えられる。

6.1.2[-殺し]タイプ

(13) の例も次のように分類できる

(24) 瀬川楓の夫殺し、刑務官殺し、警官殺し、女子大生殺し、
青木殺し、閣僚殺し、支店長殺し、下山殺し、田代刑務官
殺し、浪岡殺し、美大生殺し、バーのママ殺し、息子殺し

(25) 提灯殺し、鬼殺し、初見殺し

¹⁶ 「観音開き」や「両開き」、「片開き」のように語根複合語などで表現しても、数が限られており、それほど生産的ではない。

影山（1999）は、内項複合語は行為をひとつのひとまとまりとして捉えられるメリットがある一方で、対象が具体的にどのようなものか背景化され、わかりにくいデメリットもあると説明している。例えば、「本読み」は具体的に雑誌なのか漫画本なのか教科書なのかはつきりしない。このような特徴から、具体的（意味カテゴリーの下位レベル）なものを示す名詞が複合語に入りにくいと考えられる（cf. 河上（編）1996）。

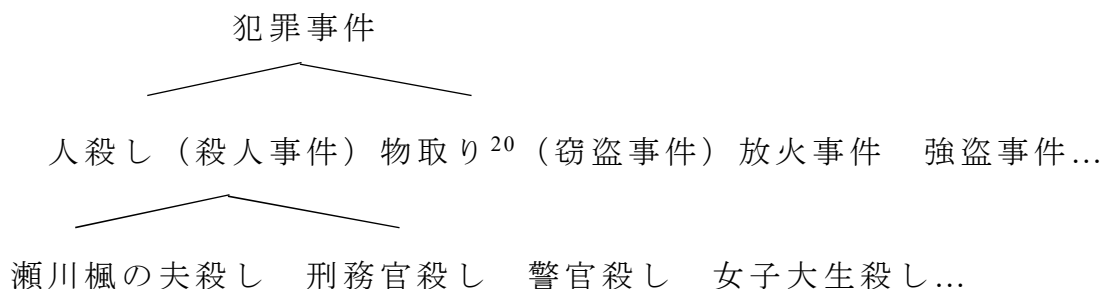
本稿が見つけた「刑務官殺し」も「人殺し」と比べ、殺す対象¹⁷が絞られているため、本来成立しにくいはずである。そして、「瀬川楓の夫殺し」は対象がさらに絞られ、特定の人物であるため、本来成立しないはずである。しかし、(24)の例の中で11例が刑事ドラマ『相棒』などから採集したものであることを考慮すると、警察関係者ならそのような複合語が可能であると考えられる。では、なぜ警察関係者の間でそのような複合語が作られるのであろうか。我々一般人にとって人が殺害された場合、その人が誰か特に問うことはない。また、特定の職種のみ狙う犯罪者もめったにいないため、殺人事件ないし殺人犯を表すのに「人殺し」のみで事足りる。従って、生産性がない。しかし、日頃このような事件を扱っている警察にとって被害者は区別されなければならない存在である¹⁸。そのため、このように特定の人物を複合語に取り込むことがあり、一定の生産性があると考えられる（cf. 浅尾 2007¹⁹）。

¹⁷ 後の議論を見ればわかるように、この複合語の前項は「殺された対象」とすべきである。

¹⁸ この分析は東北大学上原聡教授との個人談話に負うものがある。

¹⁹ 浅尾は、固有名詞にカテゴリー化機能がないため、固有名詞と結合できる動詞は生産性が高くなると説明している。似た例として「-押し」が挙げられる。「-押し（押し）」も斎藤（2005）では制限が強いとされているが、アイドルグループの「押しメン」という背景であれば、「大島押し」「指原押し」「板野押し」「小嶋押し」「篠田押し」「誰押し」に見るように生産性が比較的高くなる（cf. 筆者の調査で「-押し」表記の語は「尻押し」「念押し」「後押し」「箔押し」「目白押し」の5語である）。

図 4. [[X]殺し]の上位概念及び隣接概念



(25) は実際に前項の名詞が表すものを殺すわけではない。例えば、「提灯殺し」は下記の新聞記事から採取したものである。

(26) 低すぎる「提灯殺しのガード」見納め...東京・高輪、高さ制限1・5メートルタクシー運転手から「提灯(ちょうちん)殺し」と呼ばれ、車道の高さが極端に低い東京都港区高輪の線路下のガード「高輪橋架道橋」が姿を消すことになった。道路の制限高は1・5メートルで、屋根に掲げられたタクシーの表示灯「提灯」が天井にあたり、壊れたことからこの異名が付いた(以下省略)

<https://www.sankei.com/life/news/190222/lif1902220066-n1.html>

この記事から「提灯殺し」というのは、タクシーの行灯がよくぶつかることから作られた比喩表現である。また、「鬼殺し」はお酒の銘柄で、これも比喩表現である²¹が、片方がタクシー運転手の使用する表現で片方が酒屋の使用する表現で、両者の背景知識が異なる。「初見殺し」も比喩表現であるが、これらは(24)の[[X]殺し]_Nとは異なり、使用背景が固定されていないため、(24)ほど生産性がないと考えられる。

²⁰ 「物取り」は殺人の動機になり得るため、「人殺し」の下位概念に位置付けることもできる。しかし、その場合、同じレベルの表現は図3ではなく、「怨恨」などになる。

²¹ [https://ja.wikipedia.org/wiki/鬼ころし_\(日本酒\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/鬼ころし_(日本酒))

6.1.3 語根複合語

先行研究では語根複合語の生産性について言及がほとんどないが、下記の語根複合語もある程度の生産性及び規則性を持つと考えられる。

- (27) 有田焼、鍋島焼、伊万里焼、美濃焼、常滑焼、益子焼、大堀相馬焼、瀬戸焼、九谷焼、信楽焼、萬古焼、萩焼、伊賀焼、唐津焼、京焼、清水焼、笠間焼、楽焼…
- (28) 輪島塗、会津塗、浄法寺塗、津軽塗、大内塗、越前塗、若狭塗²²…

「-焼き」を主要部とする語根複合語は他に「大判焼き」や「お好み焼き」、「たこ焼き」、「今川焼き」、「鯛焼き」など料理、食べ物を示すものもあるが、(27)、(28)の例は陶磁器、漆器を意味する。これは次に論じる意味の透明性とも関連するが、陶磁器、漆器の知識をある程度持っている人であれば、次のようなスキーマを持っていると考えられる。

(29) [[X]焼き]_N ⇔ [SEM x=producing area of china]

(30) [[X]塗り]_N ↔ [SEM x= producing area of japan]

6.2 透明性

コンストラクション形態論に基づくと、[[X]動詞連用形]複合語は図1のようにスキーマで統一的に捉えられるため、その意味の透明性を決定する要因は語形成レベルではなくなる。つまり、先行研究が主張したように、ある[[X]動詞連用形]複合語が内項複合語であれば、それは透明な語であるというわけではない。先行研究が指摘した現象を総合的に見ると、内項複合語には規則的なものと語彙的な

²² 生物を表す内項複合語がカタカナ表記の傾向があるのに対し、(27)(28)のような工芸品を表す語根複合語は送り仮名が省略される傾向がある。

ものがある。付加詞複合語と語根複合語も同様に規則的なものと語彙的なものがあると考えられる。本稿は、ある[[X]動詞連用形]複合語が透明かどうかは程度の問題で、背景知識の面から捉える。

先行研究では、内項複合語は「動作の名付け」とされ、一般的に繰り返して行われる行為或いは多数の人が行う行為を表すとされている。先行研究でしばしば取り上げられる「ゴミ拾い」や「山登り」などがその好例である。本稿は「多数の人が行う行為」に注目し、先行研究があげた例は多くの人々が持つ経験だと考えられる。そのため、意味が「透明」である。例えば、上記の例の他に、「綱引き」、「大玉転がし」、「玉入れ」と言えば、それは単に「動作の名付け」ではなく、ほとんどの日本語母語話者が小学校などで経験した運動会などの競技項目であることも同時に想起されるだろうし、「輪投げ」「金魚すくい」「ヨーヨー釣り」と言えば、それは縁日のゲームであることも同時に想起されるだろう。

図 5. 「山登り」の隣接概念及び上位概念

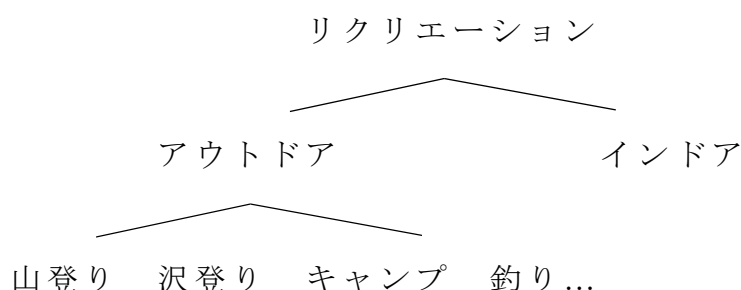
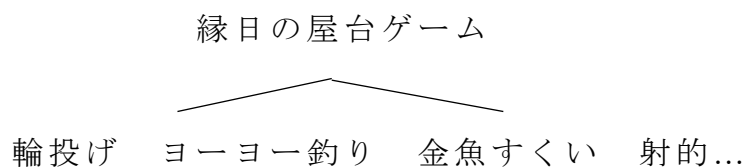


図 6. 「輪投げ」「ヨーヨー釣り」「金魚すくい」などの上位概念



後項が同一の動詞でも、背景知識（上位概念または隣接した概念）が異なることは、次のテストによって証明できる。

(31) ?陸上競技で A は砲丸投げをするが、B は輪投げをする。

(32) ?A と B は趣味が釣りで、A は鮎釣りが好きで、B はヨーヨー釣りが好きだ。

反対に、このような多くの人が持つ経験でない背景で作られた[[X]動詞連用形]複合語であれば、意味が不透明になると考えられる。例えば、(18)の「布目切り」、「錆び出し」、「お茶だき」、「すじ打ち」の意味が何か、どのような場面で用いられるかにわかに理解できないのは、これらは肥後象嵌という伝統工芸品の製造工程を意味する語であるからである。つまり、その伝統工芸品のことを知らない人なら、これらの[[X]動詞連用形]複合語の意味（フレーム）もわからないのだろう。

もう一種類は(16)に見た生物を表す[[X]動詞連用形]複合語と(17)の「鍋壊し」、「物もらい」である。これらは語源的に「XをV」と分析できるが、既に単純語に近いものになっているものもある²³。例えば、「アリクイ」はアリを食う爬虫類であることと知られているが、それと同じように特定の生物を餌としてとる「カダヤシ」はボウフラを餌として食している²⁴にもかかわらず、「#ボウフラ食い」ではなく、「蚊絶やし」という名前がついている。したがって、この知識を持っていない人にとって、不透明な語になる。

「鍋壊し」²⁵はカジカという魚（を使った料理）の別名で、主に北海道で用いられるようである²⁶。その由来は「おいしさのあまり、みんな箸で鍋をつついて壊してしまう」というところからであるが、当然この知識を持っていない人なら不透明な語になる。

²³ 西尾（1988）も「はなむけ」、「こめかみ」が語源上[XをV]に属するかもしれないと述べている。

²⁴ 大阪府立環境農林水産総合研究所より http://www.kannousuiken-osaka.or.jp/zukan/zukan_database/tansui_gairai/8750b31cde3fe95/5450b71cd645b49.html

²⁵ 岡山ではサツパという魚（を使った料理）が「ママカリ」と呼ばれている。「ママカリ」も[XをV]と分析できるが、「ママ（飯）を借りる魚」ではなく、「(おいしくてご飯が進み、) 隣のママを借りるほど」というところからついた名前だという（安井 2010）。また、「カマキリ」は「鎌で切る」に由来する説もある（<https://ja.wikipedia.org/wiki/カマキリ>）。

²⁶ <https://i-k-i.jp/2371>

7. おわりに

本稿では実例に基づき、百科事典的知識の[[X]動詞連用形]複合語に対する働きを示した。従来の研究は一般化を重視し、特定の分野（の知識）は議論の対象外となっているが、特定の分野でもその分野のみ使用される複合語があり、コンストラクションで統一的に捉えることができる。

参考文献

- 伊藤たかね・杉岡洋子（2002）『語の仕組みと語形成』 研究社。
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』 ひつじ書房。
- _____（1999）『形態論と意味』 くろしお出版。
- _____（2005）「辞書的知識と語用論的知識-語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」『レキシコンフォーラム No.1』 66-101、ひつじ書房。
- 河上誓作（編）（1996）『認知言語学の基礎』 研究社出版。
- 斎藤倫明（2005）「語形成と選択制限—文法と語彙の間—」『日本語文法』 5巻1号、121-137。
- 杉岡洋子・小林英樹（2001）「名詞＋動詞の複合語」 影山太郎（編）『日英対照 動詞の意味と構文』 242-268、大修館書店。
- 竝木崇康（1985）『語形成』 大修館書店。
- 野田大志（2010）「[名詞＋他動詞連用形]型複合名詞の構文的多義性に関する一考察」『日本認知言語学会論文集』 第10巻、204-214。
- 西尾寅弥（1988）『現代語彙の研究』 明治書院。
- 安井泉（2010）『ことばから文化へ-文化がことばの中で息を潜めている』 開拓社。
- 由本陽子（2009a）「複合形容詞形成に見る語形成のモジュール性」 由本陽子・岸本秀樹編『語彙の意味と文法』 209-229、くろしお出版。
- _____（2009b）「名詞を含む複合形容詞」 影山太郎編『日英対照

- 形容詞・副詞の意味と構文』223-257、大修館書店。
- 葉秉杰（2012）「用法基盤モデルによる[[X]動詞連用形]複合語の生産性に関する考察：付加詞複合語と解釈されるものを例に」『日本語文法』12(2)、145-161。
- _____（2013）「[[X]動詞連用形]複合語の意味用法に関する一考察：付加詞複合語と解釈されるものを例に」『日本認知言語学会論文集』13、16-26。
- _____（2015）『日中両言語における動詞由来複合語の認知言語学的研究』東北大学大学院博士論文。
- Bauer, Laurie（1983）*English Word-Formation*.
- Booij, Geert（2010）*Construction Morphology*.
- Yumoto, Yoko（2010）Variation in N-V Compound Verbs in Japanese. *Lingua* 120(10): 2388-2404.

インターネット

粹 IKI <https://i-k-i.jp/2371>

大阪府立環境農林水産総合研究所 http://www.kannousuiken-osaka.or.jp/zukan/zukan_database/tansui_gairai/8750b31cde3fe95/5450b71cd645b49.html

産経新聞 <https://www.sankei.com/life/news/190222/lif1902220066-n1.html>

Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/カマキリ>

_____ [https://ja.wikipedia.org/wiki/鬼ころし_\(日本酒\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/鬼ころし_(日本酒))

コーパス

Ninjal for TWC <http://nlt.tsukuba.lagoinst.info>

本稿は「東アジア若手研究者合同研究フォーラム」（国立政治大学にて）の口頭発表原稿「文化の語形成に対する働き-[[X]動詞連用形]複合語を例に」をもとに加筆したものである。